



## 夏が終わろうとしている

---

今年も庭の百日紅の花が咲いた。

重たそうな花の房をたわわに広げて、青い海と深紅のコントラストを楽しませてくれる。

はなびらは、どうしてこうも奇麗に開くのだろう。

ひとひら、ひとひら。

「百日紅って言っても、実際は猿が登っても滑ることはないらしいですよ」 崇さんは、職場の小さなポーチに咲いている花を眺めていたわたしに、ふいに声をかけてきたのだった。

初めての言葉が、男性らしからぬ花の話題だったから、こんなにも崇さんに傾斜していったのかもしれない。

崇さんとは、職場で、すれ違うフェリー乗り場で、今までに、幾度となく目が合った。偶然駅前で会うこともあれば、ツアーバスの窓越しに会うこともあった。 どこでも、どんなときでも、わたしは無意識のうちに崇さんを探していたし、崇さんもきっとそうであってくれていたのだ。

一瞬でありながら、絡みつくような視線の交錯が、わたしにはとても背徳的なことに思えて、不意に目を逸らす。そのくせ、次の瞬間、またあの視線を探してしまう。 初めて言葉を交わした時、もっとお互いが傾斜していることを伝えていれば、また違った夏の終わりになったのではないか。

その日、姉は落ち着きが無かった。

婚約者が家にやってくる約束になっていたからだった。そう広くもないリビングをモップ片手に何度もぐるぐると回り、ダイニングテーブルの上にわざとらしく飾られた花を、何度も活け直した。「そんなに緊張しなくても。会うのはわたしだけなのよ」 出窓に飾ってある両親の写真を見つめながら、わたしは笑った。

両親が既にないわたしたちは、二人でこの小さな家で暮らしてきた。父はわたしたちが幼いころに他界していたし、母が亡くなったのは、姉が地元の大きなリゾートホテルにフロント勤務について一年目。わたしが高校を卒業する年だった。二人だけの生活に他人が、しかも男の人が介入してくる日が来るなんて思いもよらぬことであった。しかし、そわそわと浮足立っている姉を見ていると、わたしまで温かい気持ちになってくるから不思議だ。

この家で、独りぼっちになってしまう。

そんな深く暗い海の底から湧き出るような悲しみをお腹に抱えながらも、笑顔になれるのは、幼いころから笑顔をつくるのが得意だったせいかもしれない。

約束の時間に五分ほど遅れて、玄関のチャイムが鳴った。姉は、小さく呼吸を整えて、モップをわたしに無理やり押し付けると、大股で玄関へ向かった。 リビングに残されたわたしは、どこにいたらいいいのか所在なく、部屋の真ん中でモップを持ったまま立ち尽くした。

南の窓から心地よい風が吹き込んでレースのカーテンを大きく膨らませた。

今日も南風が強く吹いているのだろう。モップを振ると、海の砂がフローリングの床にささやかな音を立て落ちた。この街が一番輝かしい海水浴シーズンは、今が盛りなのだった。

暗く長い廊下を抜けてくる姉の影と、まだ見ぬ男性の大きな影が、リビングに差し込む光で色

を帯びてきた。

姉が手をつないでいる相手は、百日紅の話をしてくれた崇さん、その人だった。

あの昼下がりのように、交錯する視線。

絡みあった視線が逸らせなかった。お互いに、逸らさなかった。

姉は、そんなわたしたちに気づくことなく、紹介を始めた。「妹の、りか。いつも話しているでしょう？ 大人しくて、もうはたちになるのに、恋人もまだなの。本当はりかを残して家を出るのも不安なのだけれど……」 姉は、照れているためだろうか。余計なことばかりを詳しく話し、なかなかソファに腰掛けるきっかけも与えてくれない。わたしたち三人は、リビングの真ん中で立ち話を続けたのだった。「綾瀬崇さん。旅行会社にお勤めなのよ。りかのバイトしているフェリー会社にもよく行くって。すれ違ったりしているかもしれないわね」

わたしは、曖昧に頷いてから、会釈をした。崇さんは、困ったような笑みを浮かべて、わたしよりも深くお辞儀をした。顔をあげた崇さんは、目の前の庭に咲く百日紅を眩しそうに見つめた。その横顔を姉は見つめている。そんな二人を、わたしは少し離れたところで視界に入れながら、台所に用意していたお酒とおつまみをテーブルに並べた。冷蔵庫からワインボトルを取り出すと、みるみる間に汗をかいた。室温が高いのだ。わたしは、喉の渴きを覚えて「早くいただきますしょう」と声を出し、二人をダイニングチェアに招いた。「ゆかちゃん、飲みすぎだよ」崇さんは、笑いながら姉に注意をした。実際に姉は、ほっとしたためだろうか、普段よりもお酒をよく呑み、陽気に酔った。「それでね、りかは両親から『空気美人ちゃん』って言われてたの。雰囲気柔らかくて、愛らしいからですって」 白ワインがなみなみと注がれたグラスを両手で回しながら、姉は昔話を始めた。出窓に飾ってある両親の写真をテーブルまで持ってきて「美人と言われるよりも、羨ましかったの」と恨めしそうな声を出した。「美人なんだから、そんなあだ名いらさないじゃないの。ホテルのパンフレットだって、お姉ちゃんの写真が使われているじゃない。空気美人は、苦肉の策よ」 わたしは、両親の写真をもとあった場所へ戻して、話を終わらせようとした。

姉は、両親が亡くなってから親代わりともなって、わたしのことを気にかけてきた。 姉の中でわたしはまだ、両親が健在だった頃の子供のままなのだ。そしてわたしも、姉の口から両親の話題がのぼると、無意識のうちに、その頃の自分に帰ってしまう。

何年前の夏だったろうか。

波打ち際で浮き輪をしっかりと両手でつかみ、離すことができないわたしを、姉は沖へと連れてゆこうとした。「どうしてそんなに怖いのか？ ふりをしているだけでしょ？」 必死で波にのみ込まれないようにしているわたしを、屈託のない声をあげながら、嘲笑した。浮き輪を引っ張る姉の力強さが恐ろしくなり、思い切り振りはらい、砂浜の parasol の下にいる両親のもとへと駆け寄る。「本当に仲良しね」 母はそう言って、わたしの砂だらけになった髪をタオルで乾かしてくれる。わたしは、髪を拭いてもらいながら、母が渡してくれた水筒の蓋に入った冷たい麦茶を両手で持って、ゆっくりと飲む。 いつの間にか隣にいた姉は、自分で髪を乾かしながら「なんでも自分で出来てしまうのは、つまらない」そう呟いて、泣き出しそうな顔で母を睨む。姉もきつと咽喉が渴いているだろう。口の中は海水で塩辛い。そう知りながらも、わたしはゆ

っくりと麦茶を飲み続けた。かわいらしく目立つ姉は、どこに行っても人の視線を浴び、愛されている。わたしを愛してくれる人は、渡したくない。それでも、水筒の蓋に少しだけ残した麦茶を、優しい笑顔で姉に渡す。受け取った姉は、喉を鳴らしながら、一気に飲み干した。

仲の良い姉妹を、母は眩しそうに見つめていた。姉は、あの時の麦茶のように、グラスの白ワインを一気にあけて、手酌でワインをさらに注いだ。「崇はね、世界で一番好きな女性が、わたしじゃないんですって」 愉快そうに、崇さんを甘い、酒臭い視線で見つめながら、続けた。

「わたしね、今までお付き合いした人たちからは『一番』って言われてきたの。でも、お別れしてきた。それって、嘘だからでしょう？ 崇はね、一番ではないって、正直に言ってくれたから、そんなところも好きなの」 崇さんは、苦笑いをしながら「もう止めなさいよ」と低い声を出した。「一番は誰なのかしら」とわたしは会話に加わった。「母親でしょう？ 正解でしょう？

男の人はね、ずっと母親が一番なのよね」 そう言う姉の視線から崇さんは目を外し、わたしに絡みつく視線を向けた。わたしは、その視線を甘く感じながら、小さく「母親ね。分かるわ」と呟いた。

崇さんは、グラスに注がれていた温くなったワインをゆっくりと飲み干し「空気美人。分かりますよ」と小さく、わたしにだけ聞こえるように囁いた。崇さんが帰ったあと、姉は酒臭い息で「どう？ いい人だと思わない？」と呟いた。「そうね」「それだけ？」 わたしは、曖昧に頷いた。姉は、そんなわたしを訝しげに覗き込んで「義兄になるのよ。もう少し、何かあるんじゃない？」と不機嫌な声を出した。「わたしが、いつもそうしているように、羨ましがれば満足？」と低い声を出した。「何よ、それ」 姉は、正面から睨みつけてきた。「そのまんまよ」 視線を逸らして、部屋へ閉じこもった。

海水浴シーズンでも、この入り江の町は年に一度は嵐の日がある。崖の上に建っているこの家は、嵐の日には大きく揺れる。去年は、古くなっていたサッシが飛び、庭の柵を壊してしまった。

窓ガラスが強風と共鳴し、今にも割れそうな音を立てる。わたしと姉は、嵐の日には一緒に眠った。数時間で去る恐怖だと分かっているけど、独りでは耐えられない。灯りをつけたまま、お互いの息を感じながら眠るのだった。姉の独身最後のだという友人たちとの旅行の予定日に、嵐がこの街にやってくることは、天気予報で知っていた。今回だけではなく、これからは毎年、独りでこの嵐をやり過ごさなくてはならなくなるのだ。その練習だと思えば、恐怖も少しは和らぐ。それでいても出窓のガラスが共鳴する音が響くたびに、思わず肩をすくめた。慣れることが、必要だ。わたしは、雲の流れが速くなってきた空を眺めて、小さくため息をついた。

早めの夕食はそうめんにした。食欲もないし、なによりも一人分の食事を用意するのは淋しい。それでも、何かをしていないと外の音に気を取られて恐怖が増すし、何も作らないのはこの先の長い一人暮らしを思うと、気が引けるのだった。薬味にするネギを包丁で刻みながら、ふと、こんな小さな日常事から、無意識のうちに、姉のいなくなる生活の予行練習をしているのだと気付き、ため息を吐いた。めんつゆを氷水で薄めながら、風の音に耳を澄ますと、か細く、しかし確かに立て続けにならされる自宅の玄関チャイムの音を聞いた。そっとドアを開けると、チエー

ン越しに崇さんの姿があった。「こんばんは。ゆかちゃんから頼まれたんだ。りかちゃんが……心配だからって」 崇さんは、それだけ言うと、下を向いてしまった。

大丈夫です。心配いりません。

そういつてしまえば、崇さんは踵を返して帰るのだろうか。雨が樋にあたる音が大きくなってきた。

その音に弾かれるように、わたしは言葉を飲みこんだまま、チェーンロックを外した。 雨の匂いと、崇さんの汗の香りが玄関に漂った。崇さんは後ろ手に玄関を閉めると困ったような、しかし迷いはない真っ直ぐな笑顔を向けた。 お互いにいずれこうなることは、うすうす予感していたのだ。 百日紅の花が、この嵐で散らないように。 わたしは、黙って崇さんに背を向けて、リビングへ続く廊下を歩いた。後ろから、そっと、付いてくる崇さんの気配を背中を感じながら、姉のことを思った。

ガラスの器の中で、くたくたになったそうめんを挟んで、わたしたちは向かい合った。「ゆかちゃんの、妹だったなんて」 安っぽいメロドラマで使い古されたような台詞に、返事をしなかった。

崇さんは頭をわしゃわしゃと手で掻きながら「つまらないことを言って、ごめん」と謝った。

わたしは、口元に手を当てて小さく笑った。「笑う時に、手を当てるのは癖なの？」 崇さんは、目を細めて、マネをしながら聞いてきた。「それから、不思議そうに小首を傾げるのもさ」と、大げさに首を横に傾けて、嬉しそうに笑い声を立てた。 わたしは、幼いころから大体において、自信がない。口元を隠す癖は、小学校低学年のころからのものだ。たとえば、先生に指されて国語の教科書を読むとき。たとえば、算数のひっさんの回答をするとき。

わたしは、小さな声に、さらにフィルターをするように手を添えてしまう。何度も担任からは注意を受けたが、直らない。その注意される大きな声が怖くて、首を傾げた。思えば、小さく首を傾げる癖も、その頃に身につけてしまったものだ。「よく気づいたわね」 そう答えると、崇さんは顔を赤らめて、それは気づくよ。だって見てたからね。と小さく呟いた。 窓ガラスに雨粒のあたる音がリビングに響いている。強風がこの家を包みこみ、ゆりかごのように揺らす。「基礎はしっかりしているんですけど。でも、設計上ね、二階が迫り出しているから、どうしても揺れが大きいの」 わたしは、そう言ってそうめんを崇さんの方へ差し出した。その手を、崇さんは、強く握んだ。「痛い」と、嘘をついた。「僕の方が、もっと痛いよ」と、さらに指先に力を込めて握りしめたまま、わたしの隣に滑り込むようにやってきた。 姉が本当に、わたしと崇さんを二人きりにするような願いをしたのだとすれば、わたしを買いかぶり過ぎている。 わたしを試しているのだろうか。それとも崇さんを試しているのか。もしくは、崇さんの嘘なのかもしれない。「あの日、百日紅の話。とても楽しかったの」 禁句だと知っていた。「これ以上、何もしないから」 そう言って、崇さんはわたしの肩を強く抱いて、首筋に唇を這わせた。

わたしだって、知っている。

男性が何もしないというのは、するということだ。そして、その意味を知っているわたしのことを、姉は知らない。それでも、それだからこそ、越えてはいけな一線があるのではないか。

「わたしね、姉の笑顔を見るのがとても好き」 「そんなこと言われると、本当に何もできな

いよ」 そっと唇を離して「でも、今夜は一緒にいたいんだ」と耳元で囁いた。 嵐が去る気配を窓越しに感じながら、わたしと崇さんはリビングのラグの上に並んで座った。「一番好きなのは、母親なんでしょう？」そう囁くと、崇さんは「言ってなさい」と笑った。「ひどい人」そう言うと、崇さんはわたしの鼻を強くつまみながら、唇を吸った。やっと離された唇から大きく息を吸い込み「死んじゃうわ」と少し怒った声を出すと「殺しちゃいたいよ」と意地悪く笑った。「空気美人。そんな言葉じゃ表せないと思ったけど、それ以上ぴったりの言葉ってないね」そう言うと、また鼻をつまんだままキスをした。 何度もキスを繰り返して、何度も海なりを聞いて、何度も浅い眠りに落ちた。 差し込む日差しの強さに目が覚めた。 隣で崇さんは口を小さく開けて眠っている。寝顔を見下ろしながら、姉が悪い。そう思った。そして、崇さんが悪くて、わたしが一番悪いと考えたすぐ後に、誰も悪くないことに気づいて一人で嘔き出した。恋に落ちてしまうことを、誰がとがめるのか。 誰も、なにも、悪くない。ただ、嵐のタイミングが悪かっただけのことだ。そして、嵐は永遠には続かない。足早に通り過ぎてしまうものなのだ。咽喉の渇きに気づき、台所へそっと向かうと、背後から「おはよう」という声が追いかけてきた。返事をしないで食器棚から、グラスを二つ取り出した。 リビングに戻ると、いつの間にか庭用のサンダルをつま先につっかけ、百日紅の木に触れている。「美しいでしょう？ この木の赤と、空と、海の色がとても好きなの」 こんな風に、二人で会話ができるのは、姉のお陰なのだ。皮肉なものだわ、と小さく呟いて、崇さんを見つめた。「海に行こう」 崇さんは、手渡したグラスのお茶を一気に飲み干すと、屈託のない声を出した。

砂浜を見下ろすと、パラソルの花が咲き始めている。

ひとひら、ひとひら。

赤や緑のパラソルが、所狭しと広がり始め、ビーチ一面に花が咲いたような景色に変わる。「みて。パラソルの花」 そう教えると、崇さんはいうれしそうに海を見下ろし、それからわたしの肩を抱いた。「そんな言葉無いのに。まるで昔からある花の名前みたいだね」 そう言って、わたしの髪を撫でた。 わたしは、崇さんの顔を見上げる。なにも言わずに、唇をそっと重ねる。麦茶の香りが、わたしに移った。 海岸には人が溢れかえっている。砂が焼けるように熱く、少し荒れている波はいつもよりも強く太陽の光を乱反射している。「わたしはね、海で泳ぐのが嫌いなもの」 波打ち際を歩きながら、少し離れて歩いた。「でもね、海が好きで。よく散歩をしたのよ。姉は泳ぐのも好きで、幼いころからビキニで跳ねまわっていたの」「りかちゃんはワンピースの水着？」「そう」「分かりやす過ぎる」 崇さんは大きな声を立てて笑った。「どうして泳ぐのが嫌いなもの？ かなづちなもの？ それとも塩っからいから？ 波が怖いもの？」 次から次へと疑問をぶつけてくるので、今度はわたしが笑った。「そんなに色々、答えられないわ。どうしてそんなに聞くの？」「なんでも、知りたいから」 そう言うと、わたしの手を握った。誰かに見られたら……。そう思うと、手を離さなくてはならないことは重々わかる。 それなのに、わたしは握る指先に力を込めた。そして、崇さんもそれに応えるように強く握り返してくる。「水着の中に、黒い砂粒が入り込んで、かゆいんだもの。だから、泳ぎたくないの」 二人きりで、楽しい。わたしと崇さんは言葉を交わさなくても、二人きりで楽しい方法を、楽しんでることを、自然と知っている。「空気が一緒なのかな」 崇さんは、そう呟いた。「ず

っと……共犯者でいたいけれど」わたしは、少し大きな声で「お義兄さん」と呼びかけてみた。崇さんは返事をせず、握っている手に力を込めた。その手の力は、わたしを沖に連れてゆこうとする姉の狡猾そうな笑顔と、一人タオルで髪を拭いている泣き出しそうな顔を交互に思い出させて、眩暈を起こす。真夏の光線が、海岸の脇を通る国道のアスファルトの上で跳ねている。「眩しい」目を細めて、わたしは冷たい海水に足をつけた。

足で黒い砂を払いながら歩くと、指先にひかるガラスを引っかけた。

拾ってみるとそれは、青く、薄く曇ったビー玉だった。真ん中に大きなヒビが入っている。「ラムネのビンに入っていたのかしら」わたしは、そう呟いて、太陽の光を小さなガラスに集めた。そして、じっとその様子を見ている崇さんに「見て」と声をかけて、掌の真ん中にビー玉を乗せて少し転がしてから、口元に運び、両掌をからにして、空に振って見せた。「口に入れちゃったの？落ちていたものを。汚いよ」崇さんは慌てふためいて、わたしの口の中を確認しようとした。わたしはそれを避けて「平気よ。いいのよ。海はなんでも綺麗にしてくれるんだもん。大丈夫。厭なことも流してくれるし、綺麗なものに変えてくれる力があるのよ」と小さく笑った。そして、ぱっと掌を口に戻し、ビー玉をもとあった掌の窪みに戻した。「それに……手品なもの」「まったく」崇さんは、困った声をだして「家に帰ろう」とわたしの腕を引っ張った。姉の旅行は、あと一泊残っている。わたしたちにも、また。拾ったビー玉をそっと、出窓に飾られている両親の写真の前に置いた。ガラスのフォトフレームの光を受けて、ビー玉の傷が鈍く透き通った。崇さんは、黙って、そっと写真を伏せた。「ひどい男だろ」崇さんは、泣き出しそうな顔をして、わたしを見つめた。「どうしていいのかわからないんだ。最低な男だろう？」淋しくほほ笑む崇さんに「本当に、最低ね」と答えてから「だから……。わたしも、最低なのね」と呟いた。崇さんは、わたしを両手で抱きしめて、ごめん、と囁き、腕に力を込めた。

姉は、上機嫌で旅行先から、山のようにお土産を抱えて帰って来た。楽しかった旅行の話は、夜更けまで続いた。わたしは、見ず知らずの姉の友人たちの話を、ただ頷いて聞き続けた。その話を聞き流しながら、わたしと崇さんの二人で過ごした日を、昨日のことなのに懐かしく思い出していた。「あしたの花火大会。崇さんも一緒にいいでしょう？」姉は、わたしの返事を待たずに、携帯電話を取り出し、崇さんに連絡をした。「海上花火大会を、三人で見ましょう」海水浴シーズンに数回行われる海上花火大会は、観光客向けとはいえ盛大なもので、わたしたちの庭からよく見える。縁台とテーブルを庭に出して、眺めるのが、毎年の恒例行事になっているのだ。二人で見ていた花火を、今年は三人で眺めることになったのだった。そして、この先もきっと。

「あしたは、スイカが食べたいな」姉は、わたしに「買ってきて」という意味を込めて声に出した。

翌日の昼下がりに、わたしは昨日の姉の言いつけ通りに、財布を片手に外へ出た。真夏の光線が小石の小さなおうとつまで、焼きつくしている。白い石の反射する光の眩しさに目を細めて、わたしは八百屋さんへの近道を急ぐ。細い急坂で、舗装もされていないので足を取られそうになるが、両サイドには木が生い茂って涼しい木陰を作ってくれている。森の香りの中に、潮の香り

が混じってくる。その角を左に曲がれば、安くておいしいスイカを売っている行き付けの八百屋だ。いつものように、四分の一カットのものを買って、ずっしりと重いビニール袋を持ち上げる。指先に食い込み、赤みを帯びてくる。

一人になったら、こんなに大きな果物を買うことは無いのだ。スーパーで、味気ないカットフルーツを買うことになるのだろうか。涙が頬を伝った。一人になるのが怖いわけではない。ただ頬をぬらす涙が唇まで入ってきて、わたしは思わず「しょっぱい」と大きな声を出した。

玄関前で、脇の下を自分で擦って、笑い声を立ててから、玄関扉を開けると、男性の靴が置いてあった。崇さんがやって来ているのだ。わたしは、脱いだサンダルをそっと、その大きな靴に寄り添わせて、リビングへ向かった。挨拶を済ませて、わたしは台所でスイカを切った。

青臭い、甘い香りが漂う。

包丁に滴る甘い蜜が、指先に伝う。そっと指をなめてみる。「まるで、甘いものに群がる……虫みたいね」いつから見ていたのか、姉がわたしに声をかけた。「そう？ 甘いものには色々群がるのは仕方ないわよ」わたしは、目を合わせずにスイカを切り続けた。思わず包丁を握る手に力を込める。「お姉ちゃんだって、そうでしょう？ 一番甘いところが、昔から好きじゃない」そう言って、台所に姉を残し、スイカを持ってリビングへ向かった。崇さんが嬉しそうな声をあげて、一番端っこのスイカに手を伸ばした。それに続いてわたしも手を伸ばす。姉は、遅れてやってきて「真ん中のを頂戴」と行儀悪くスイカを手にした。

「幼いころから、そうなのよ」わたしは、崇さんに小さく耳打ちした。「なんでも、一番なの」姉は、黙ってスイカを食べ続けた。

一人、手持無沙汰になり、縁台に腰掛けたままビーチを見下ろすと、パラソルの花がひとひら、ひとひら、散り始めている。太陽の光は深いオレンジ色に変わり、もうすぐ夜がやってくることを教えてくれる。あの砂浜を、数日前わたしと崇さんは手を繋ぎ、歩いていたのだ。あのビーチを、両親はどんな気持ちで見つめているのだろうか。

そっと、叱ってほしい。そして、やっぱり愛してほしい。

父からも、母からも、姉からも、崇さんからも愛されたい。一人ぼっちに、なりたくない。正直な気持ちなのに、それは、欲張りなことなのだろうか。答えは出ない。

ただ、百日紅の花の房が小さくなってきたことに気づいた。あと数カ月で、姉はこの家を出てゆき、わたしは、花が散り、枯木のようになってしまったこの木と共に、ここに残る。

それだけのことだ。

そして、来年もきっと、百日紅は赤く開き、わたしはその赤と海の青に目を細める。

小さな月が、海と空の境に昇り、夜の帳が下りたと同時に、姉たちが、缶ビールを手を持って、庭先に出てきた。眼下で、無数の小さな光の粒が、夜の真ん中を飛び散った。続いて胃袋をギュッと圧縮するほどの爆音が轟いた。縁台に姉を真ん中に挟んで座り、一斉に暗闇を見つめた。打ち上げられた火の玉が、空に向かって緩やかに上昇し、小さな光の粒に分裂する。その瞬間、爆発音が耳を劈き、夜空は一瞬割れる。浜から目を逸らせば、そこには真っ暗な闇が口を開けている。この落差が、恐ろしくて花火を好きになれないのだった。

姉はわたしが、花火を恐れていることも知らない。



知っているようで、何も知らない。それは、お互いさまなのだろう。

指先で肩を二回たたかれた。姉の背中越しに、崇さんを見ると、掌に、いつの間にか持って来たのであろう、あの日の傷の付いたビー玉を乗せている。

そっとその掌を口に持っていき、からになった両手をヒラヒラとさせた。

わたしは、声を殺して笑った。「ちゃんと花火を見ているの？」　姉は、崇さんの方を向いて、少し怒った声を出した。　スイカの甘い香りが漂った。

姉は、スイカは甘いところしか口にしない。端を齧ってみれば、スイカは青臭く、それはそれでいいものなのに。知っていても、知らないふりをして生きているのだ。

姉にとってのスイカは赤く、甘く、冷たいものでなければならない。蜜を欲しがる虫が群がるようなものでなくてはならないのだ。また、そのように仕向けていたのは、わたしなのかもしれない。

再び崇さんは口元に手をやり、掌にビー玉を戻し、パンツのポケットに滑り込ませた。

わたしは、唇に手を当てて首を傾げて笑う。

こうなることは、お互いに知っていた。

それだけのことだ。

夏が終わろうとしている。　　　　　（了）